

令和8年度 校内研究計画

1 研究主題

主 題：子どもが自ら問いを立て、仲間と共に未来を創る「東陵学園モデル」の構築
副主題：～学びの連続性を意識した効果的な指導の在り方を探る～

2 研究主題設定の趣旨

本校は義務教育学校として開校し、2年目を迎える。前期課程・後期課程を貫く9年間の学びの連続性を基盤としたカリキュラム・マネジメントの一層の充実が求められている。

児童生徒は、学習に対して真面目に取り組み、与えられた課題にも粘り強く向き合う姿がうかがえる。一方で、課題に対して自ら問いを立てたり、学びを自分事として捉えたりする力には個人差がある。また、学習の見通しをもつことや、自分の考えを表現することに苦手さを感じている児童生徒も一定数存在する。さらに、学年が上がるにつれて、複数の情報を関連付けて考える場面や、仲間と協働してよりよい解決方法を探る場面において、思考が停滞する様子も見受けられる。学習状況調査の結果からは、基礎学力の定着にも課題があることが明らかとなっている。

こうした実態を踏まえ、児童生徒が9年間を通して自ら問いを生み出し主体的に学びに向かうとともに、仲間と対話しながら学びを深め、自分の考えを表現する力の育成を図る。

本研究では、国の「教育課程柔軟化サキドリ研究校事業」による調整授業時数制度を活用し、1コマ5分の短縮により、教師と児童生徒双方に教育課程の「余白」を創出する。この「5分短縮」を実現するためには、9年間を通して育成する資質・能力を見据え、内容の重点化と精選を行うことが不可欠である。また、前期課程・後期課程の教員が在籍していることから、9年間の学びの系統性を踏まえた協議が可能である。教員同士が協働して内容の精選に取り組むことで、実践的で持続可能な教育課程の再編が期待される。

このような協働体制を基盤とし、9年間の学びの連続性の中で、自ら問いを立て、仲間と共に未来を創る児童生徒の育成を目指す。

3 研究の目標

9年間共通の学習プロセス構築や学習内容の精選を通して、自ら問いを立て、主体的に学びに向かうとともに、協働的に学ぶ児童生徒の姿勢を伸ばし、東陵学園モデルを創る。

4 研究内容

(1) 研究の目的

① 9年間の学びの連続性を生かした主体的・対話的で深い学びの実現

学習を「課題設定→思考・対話→振り返り」のプロセスで捉え、中心課題を軸とした教科横断的な学習構造へ転換することで、前期から後期へと繋がる深い学びを実現する。

② ICTを基盤とした基礎学力の定着とキャリア形成の推進

補充の時間および情報学習の時間を計画的に位置付け、基礎学力の向上と情報活用能力の系統的育成を図る。

③ 教育課程の柔軟化を通じた教員の協働と専門性の向上

前期・後期課程の教員が協働して内容の精選に取り組み、創出した特例時間（年間30コマ）を活用した組織的な研究・研修を行い、指導力向上を図る。

(2) 研究の内容・方法

① 主体的・対話的で深い学びへ発展する指導法の改善

- ・ 9年間共通した40分(45分)の学習プロセスでの指導(課題設定→思考・対話→振り返り)
- ・ 課題設定(提示)の工夫による問いの共有
- ・ 内容の精選(5分短縮)についての検討
- ・ 対話に重点を置いた指導「トーキングタイム」(ペア、少人数グループ、自由)
- ・ 前期・後期の学習内容のつながりや各教科の関連を意識した系統表の見直し
- ・ 前期課程と後期課程の教員が協働し、学びの連続性を意識した指導法を開発・検証

② 情報活用スキルの向上とICT機器を活用した個別最適な学びと協働的な学びの推進

- ・ ICT機器を使った授業改善(課題提示、協働学習、振り返りなど)

MetaMoJi、Teams、Canvaなど

- ・ 基礎学力定着のためのタブレット学習
- ・ 補充学習内容を自己決定
- ・ 「情報活用能力系統表」の構築と運用

発達段階ごとに「リテラシー」「情報モラル」「スキル」を整理した系統表を作成し、情報学習の時間を活用して段階的にスキルを育成する。

③ 教育課程の柔軟化の実施

- ・ 実用的な教育課程の再編
- ・ 先行研究の紹介
- ・ アンケート調査
- ・ 10分間の補充学習と情報学習を実施

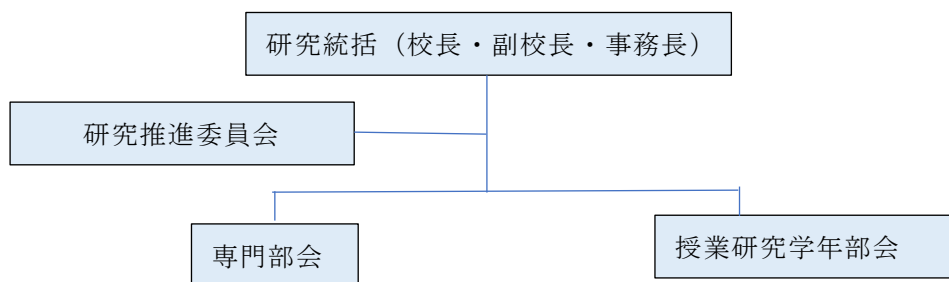
「まなびタイム」: 国語・算数(数学)・外国語・社会・理科を中心とした補充学習

「みらいタイム」: 情報活用スキル、情報モラル、リテラシーを高める情報学習

5 研究組織

(1) 組織の構成

前期課程・後期課程の教員が一体となり、9年間の連続性を担保しながら研究を進めるため、以下の体制を構築する。



- ・ 研究統括(校長・副校長・教頭・事務長) 研究の全体構想、予算管理
- ・ 研究推進委員会(校長・副校長・教頭・教務・S Tリーダー・研究主任・研究副主任、専門部会部長)

(2) 専門部会

① 授業づくり部会

- ・小中接続を意識した指導法開発、指導法改善
(学び方の共通理解、トーキングタイムの持ち方、きまりづくり、意見交流の工夫)
- ・「課題設定→思考・対話→振り返り」のプロセスで共通した授業モデルを構築
- ・9年間で共通した「学びのきまり」の検討、修正

② 学び・みらい部会

- ・「情報活用能力系統表」の作成
- ・「補充の時間」「情報学習」の計画
- ・捻出した時間を活用した教員のスキル研修

③ 学習環境部会

- ・教育課程の再編、各教科年間計画の時数調整
- ・調査分析（児童アンケート、学習状況調査等）
- ・先行資料研究
- ・掲示物の作成、掲示
- ・「キャリア教育系統表」の作成

	前期	後期
授業づくり部会		
学び・みらい部会		
学習環境部会		

(3) 学年部会

- ・授業作り、指導案検討、研究授業、研究授業の参観と事後研究会

学年部会	構成員
下学年	
上学年	
後期	

6 研究計画（2か年計画）

(1) 今年度の計画

月	日	曜日	事項	研究内容	調査等
4	6	月	研究推進委員会	研究の方向性、研究主題	学力調査
4	22	水	全体会	研究主題、研究組織	TOFASテスト
6	10	水	専門部会	年間計画や活動についての報告	
6			先行授業		児童生徒アンケート
7			全体会	全体授業研究会①	
8			全体会	講師招聘研修	
8			専門部会	各部会の取り組み	
9	9	水	全体会	全体授業研究会②	

11			全体会	全体授業研究会③	
12	16	水	全体会 専門部会	まとめについて	TOFASテスト
2	24	水	全体会	まとめ 次年度に向けて	

※教育課程再編で生み出した時間を使って、教材研究や指導案検討、専門部会の活動などを行う。

(2) 次年度の予定

4月～7月	カリキュラム本格運用開始、組織的研修の継続
10月	【専門家招へい】実践に対する客観的評価と助言（予算使途：謝金）、必要に応じた追加視察
12月～2月	研究の総括、最終報告書の作成（成果と課題を整理）

7 研究授業について

- ・一人一授業

- ・全体授業研究会の研究授業は、下学年、上学年、後期の各グループから1本ずつ行う。

各グループで指導案検討を行い、原則全員参加で事後研究会を行う。グループのメンバーは、指導案作成や授業準備を協力して行う。

全体授業研究会の授業を行わない人は、指導略案（※）を作成し、研究授業を行う。同じ学年部会の研究授業は参観し、他の学年部会の研究授業の参観は自由とする。前期課程職員と後期課程職員が互いに参観し、9年間のつながりを意識できるようにする。グループ研の授業は、事後研究会は行わない。参観者の感想を授業者に渡す。

指導略案（※）

第（ ）学年（ ）学習指導案 （ ）月（ ）日（ ）曜日（ ）時間目 場所（ ） 学級（ ）年（ ）組（ ）名 指導者（ ）			
題材名			
各学習プロセスの活動説明	課題設定	思考・対話	振り返り
関連する学年、教科領域			
5分短縮のための工夫			

（A 4半分程度のもとする。）

8 まとめの方

- ・授業の指導案、略案とともに、成果と課題をまとめる。
- ・専門部会ごとに成果と課題を作成する。